

最近はとんとご無沙汰だが、昔はカラオケによく行った。その時よく歌ったのが、憂歌団の「おそうじオバちゃん」これを歌うと、よく受けた。

元歌は「おばちゃんのブルース」という笑福亭仁鶴の歌で、おばちゃんが明るくビルの掃除をしながら自慢の一人息子を一流のサラリーマンに育て上げる。しかし息子は嫁を貰い離れてしまう。おばちゃんをあきらめて絞り足りない雑巾のように初めて泣いたという物悲しい歌である。中学生のころ朝日放送のヤングリクエストでよくかかっていた。リクエストNo.1になったこともあった。そのころ朝日放送は仁鶴、毎日放送はヤングタウンで桂三枝を押ししていたからかもしれない。仁鶴さんどうしてるのかな?土曜の昼のNHK、ベカこが代行したままや。その仁鶴の歌を憂歌団が面白おかしく歌詞を変えて、ブルース調にしたのがこの歌だ。憂歌団は基本的には、ブルースバンドだ。面白い歌もあるが普通の歌もある。



関西にはブルースバンドが多い気がする。West Road Blues Bandのような、シュツとしたのもいるけど、オリジナリティに欠ける。僕が好きなのは、オリジナリティに溢れたバンドだ。

ここに一枚のレコードがある。1975年発表された上田正樹と有山淳司の「ぼちぼちいこか」である。残念なことに一度水没している。久しぶりに聴こうとしたらジャケットがカビだらけだった。レコードのほうは全く問題なくちゃんとした音が出た。CDも持っていないし、Spotifyにもまだないので、今聴こうとしたらこれしかない。学生時代買ったレコードだが就職でこっちに来てからのほうが、たくさん聴いた気がする。酒を飲んで、大阪を懐かしんでよく聴いた。カラオケがなかったので、寮の友達にギターを弾いてもらってよく歌った。会社の食堂で懇親会をやった時にアカペラで歌ったこともあった。



何曲か好きな歌がある。

怪しい物売りの口上から始まる「大阪へ出てきてから」。

地方から一発当てようと、いさんで大阪にやってきたけど、どうしようもおまへんわという歌。よく酒を飲んで、「東京目指して大阪を出てきたけど、こんな北関東に流れて来てしまって…茨城弁で怒られるわ…納豆臭いわ…大阪離れなきゃよかったなあと ♪大阪へ出てきてからもう1年、どぎつい茨城弁にも慣れたけど…」って歌った。

「可愛い女と呼ばれたい」

あたいは人並みに結婚なんかしたくない、好きな男とただいだけ…と、オカマの切ない心を歌った歌である。数年前柏で上田正樹を聴いた時この歌をリクエストしたけど、後述する「とったらあかん」を歌われた気がする。

「あこがれの北新地」

大阪の北新地といえば、東京でいえば銀座みたいな高級クラブ街。実は大阪には貧乏な学生時代しか居なかったので、旨いもんも旨い酒も飲んだことがない。ましてや北新地なんて行ったことありまっかいな。その誰もがあこがれる北新地で、しんどい目してやっともらったボーナスをパーツとぜんぶ使ってもらたるか…と氣勢を上げるが、ホステスのねえちゃんに「ここはあんたらが来るとこや おまへんで」って言われてしまう。

「とったら あかん」

歌というより語り、作詞は不詳ということになってるけど、昔から大阪に伝わる話みたい。桂三枝もやってた気がする。一度車の中でこの手の話を NHK-FM の午後の番組でいっぱいやってるのを聞いた。その後ネットで検索するも手掛かりはない。

夏の暑い晩、あんまり寝苦しいので表を歩いていると、おなごの下着や女の寝乱れ姿に手が出て、監獄に入っている間に、女房の小春は人の「かかあ」に、息子は行方知れず。柏で聴いた時は、覚せい剤に手を出す三番もあった。

もともと関西には「受験生ブルース」「帰ってきた酔っ払い」などの面白いフォークソングがあった。それがブルースという形で復活したのである。

ブルースというのは、元来黒人の虐げられた歌なんで自虐的である。面白い+自虐的な大阪ブルースが誕生した。本場のブルースも歌詞がわからないから勝手に悲しい歌だと解釈しているけど、本当は面白い歌かもしれない。Hoochie Coochie Man なんて、「チッチキチーやで」って言ってるのかもしれない。

面白い+自虐的、これはまさに大阪のお笑いである。大阪のお笑いには、自虐ネタが多い、自分を笑いものにするのである。

昔、見た映画で、「鬼の詩」というのがあった。原作は藤本義一で直木賞作品である。大阪の噺家、桂馬喬の芸に対する執念を描く。ATG で映画化され、片桐夕子も出ていた。

瘡で顔中痘痕になった噺家が、痘痕の穴にキセルをつるして客の笑いを取る話である。馬喬のモデルは桂米喬とされるというから実在の人物である。笑いになるものは何でもネタにする。

私生活をネタにしたり、アホをネタにしたりして…昔活躍していた平和ラッパなんか本物のアホに見えた。うちのお爺ちゃんがよく言っていた、「ラッパは、アホの真似してるけど、ホンマはカシコいんや。カシコなかったらアホの真似はでけへん」という意味不明な解説が入るぐらい上手なアホぶりやった。藤山寛美のアホも上手かった。東京の粹な笑いに比べて大阪のお笑いは、自虐的なのが多い。自分を笑ってもらうのである。



このことは落語の「時そば」と「時うどん」を比べるとよくわかる。東京と大阪の違いは、そば・うどんだけではない。登場人物が違う。

東京は前の夜、蕎麦屋をおだてて、最後に勘定をごまかすところを見ていた男が次の日同じようにして失敗する噺である。二日目の蕎麦屋が店・味共ひどいのである。かたや大阪は、気の利いた男とちょっと抜けた男が二人でうどんを食いに行く。大半を気の利いた男に食べられてしまった、抜けた男が次の日同じことを一人で繰り返す話である。どちらも昨晚と時刻が違うため反対に勘定を多く払ってしまう。

ポイントは誰がトロイか？「時そば」はぬるくて汚い蕎麦屋、「時うどん」は二人を一人で演じる自分である。自分をネタにして笑いを取るのが大阪の笑いである…と、つれづれなるままに、無理くりブルースと大阪のお笑いを結び付けてみました。

次に私のオーディオライフの事を。

中学の時買ってもらったテクニクスのセパレートステレオ「SKU-2752」から始まり、オーディオには興味があったのだが、お金と場所の問題もありそこそこ音が出りゃいい程度のシステムしか持っていなかった。でもいい音にあこがれはあり、オーディオ店に行ったり、カタログを集めたり、雑誌を買ったり、Jazz 喫茶に行ったりしていた。



2011 年に仕事で中国の蘇州にわたり、一人で住むにはほどほど広いアパートを与えられた。同僚に真空管アンプが割安だと紹介され上海の雑居ビルにあるオーディオ屋にいった。そこで真空管のセパレートアンプと CD プレーヤー、Phono イコライザーを求めたのがちゃんとした音との付き合いの始まりだ。Dynaudio の「EXCITE X12」というブックシェルフスピーカーも同時に購入した。ちなみにスピーカーはその後「FOCUS 220 II」というトルボーイに更新。

Tannoy との出会いは、蘇州の街を自転車で散歩していた時 1 軒のオーディオ屋が目にと留まったのがきっかけだ。そこに Tannoy のポスターが飾ってあり、改めて後日試聴させてもらうと、別の建物に、連れていかれ、そこには、「Turnberry」や「Stirling」が鎮座していた。試聴は、「Stirling」。元々 Classic 向きと聞いてたのだが、もっていった音源が Jazz と Rock だったのにもかかわらずびっくりの音、それから Tannoy に惚れ込んでしまった。

中国で購入することも考えが、変なものをつかまされても嫌だったので、買うなら日本に帰ってからにすることにした。

2015 年に帰国し定年を迎えたので自分へのご褒美という事で「Kensington」を購入、初めは中国製真空管アンプとの組み合わせで鳴らしていたが、よりクリアな音が聴きたくなり Luxman のアンプを購入し、現在に至ってる。

もし無限の場所とお金があれば、迫力の JBL の 38 cm とか、フランコセプリンの様なかっちりとしたものが欲しい。数年前神戸のオーディオ屋さんで聞いた JBL の「EVEREST DD55000」と FRANCO SERBLIN の「Accordo」の音が忘れられない、あと Audio Union で聞いた AVALON の「Isis」もよかった。

現在、サラウンドシステムも混在させており、YAMAHA の AV アンプから、フロントハイ、フロント、サラウンド、サラウンドバック、夫々右と左、合計 8 本のスピーカーを鳴らしている。サブウーファーは不自然なので使っていない。フロントの 2 本は、AV アンプから Luxman 経由で「Kensington」を駆動、センタースピーカーは、使うとそれがメインになり「Kensington」がほ

とんど聞こえないので使っていない。

ソースは、ブルーレイレコーダー経由で映画や音楽のライブ映像、パソコン経由で YouTube の映像や Spotify の音楽を聴いている。音の豊富なピンクフロイドの様なプログレシブロックや、サントナ、電気マイルスなんかの音楽はサラウンドにして聴くとなかなか面白い。録画した映画、相撲や野球なんかのスポーツ番組も臨場感があって楽しめる。

最後にこの会に入会し、音楽やオーディオに対して深い情熱、高い知識をお持ちの諸先輩にお会いし、時には自宅に訪問させていただき、その哲学を聞いたり感じたりしてとても勉強になっております。ある意味異端児的な私ですが、今後とも末永くご指導ください。



我孫子オーディオファンクラブ <http://www.aafc.jp/> 2020年6月号

編集責任者 鈴木 道郎